

タイトル Title	〔資料紹介〕 森徹山《柳下牧童図》（関西大学図書館所蔵） <i>[Introduction to Materials for Study] Mori Tetsuzan, "Pastoral Children under Willows" (Kansai University Library)</i>
著者 Author(s)	中谷伸生 <i>NAKATANI Nobuo</i>
刊行物名 Journal Name	関西大学芸術学美術史研究学会 eジャーナル 第2号 <i>Society for Art & Art History Studies at Kansai University E-Journal, no.2</i>
刊行者 Publisher	関西大学芸術学美術史研究学会 <i>Society for Art & Art History Studies at Kansai University</i>
刊行年月日 Publication Date	2021-12-31
公開年月日 Release Date	2022-1-18
資源タイプ Type	資料紹介 <i>Introduction to Materials for Study</i>
URL	

【資料紹介】

森徹山《柳下牧童図》(関西大学図書館所蔵)

(Introduction to Materials for Study)

Mori Tetsuzan, "Pastoral Children under Willows" (Kansai University Library)

中谷伸生

Nobuo NAKATANI

Mori Tetsuzan (1775-1841), "Pastoral Children under a Willow Tree," is one of the "Pastoral Children" paintings that were popular in the late Edo period. This painting



was painted in the latter half of the 18th century to the first half of the 19th century during the Edo period, and it has a compliment written in ink by Kan Chazan (1748-1828), a Confucian scholar and Chinese poet from Hiroshima. Mori Tetsuzan may have seen Nagasawa Rosetsu's "Pastoralist Whistle" (Kyūshōin-jiin, Kyoto). It is not so surprising that Tetsuzan, who was counted as one of the ten philosophers of Omon along with Rosetsu among the disciples of Maruyama Ōkyo, visited Kyūshoin, one of the pagodas of Kenninji Temple in Higashiyama, Kyoto, where the paintings of Rosetsu, his senior, are kept. Mori Tetsuzan was from Osaka and was the son of Mori Shuhō, but in the 1790 (Kansei 2) edition of Naniwa Kyōyū Roku, he is described as the son of Mori Shūhō, Sosen's younger brother, so we know that he was adopted by Sosen. For a time, he left the Mori School in Osaka to become a disciple of Maruyama Ōkyo. He

【図1】 森徹山《柳下牧童図》

“ painted " Figure of Pastoral Children and Cows ", which was a popular painting theme in the late Edo period, suggesting his relationship with Rosetsu and also showing the exchange Rosetsu, and also showing the exchange between painters in Kyoto and Osaka and the atmosphere of the same period.



【図2】森徹山落款



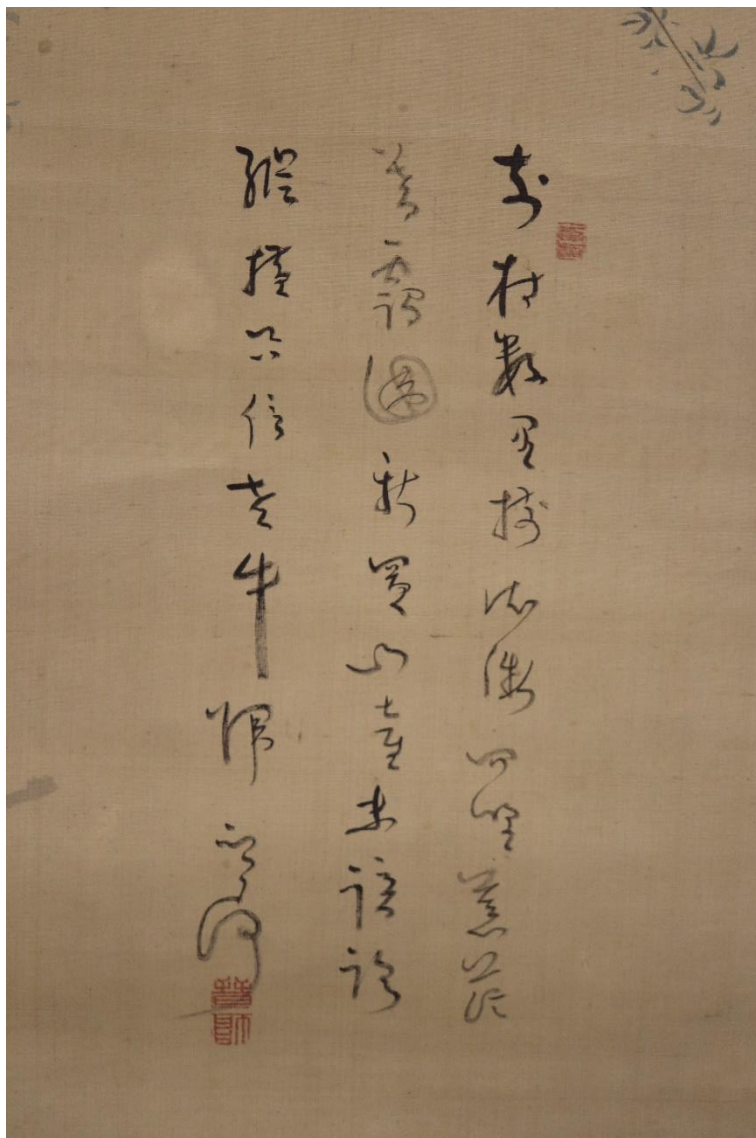
【図3】菅茶山落款

「牧童図」は江戸時代後期に流行した画題である。有名な作品としては、長澤蘆雪(1754~1799)の《牧童吹笛図》(京都・久昌院)が遺存しており、蘆雪の大画面の左上に「平安蘆雪指画」と墨書されていることから指頭画であることが分かる。牛の背中に乗る牧童は、両手で支えた横笛を吹き、牛の動きには動じることもない。森徹山の《柳下牧童図》【図1】も基本的にモチーフと構図ともに同じであるが、徹山の牛は頭部が向かって左側にあり、後ろを振り向いている姿で描かれた。激しい動勢を感じさせる蘆雪のそれと比べると、徹山の牛は動きを止めて佇立している。牧童については、両者ともにほぼ同様の姿勢である。森徹山《柳下牧童図》(掛幅)は、江戸時代の十八世紀後半から十九世紀の前半に描かれた絵画で、絹本墨画淡彩、縦117,0、横50,5センチメートルで、画面右下に「徹山」のサインと「守真」の朱文長方印【図2】が捺されている。加えて、画面上部には、備後出身の儒学者で漢詩人の菅茶山(1748~1828)の賛が見られる。サインを「晋帥」と墨書し、「晋師」の朱文長方印(長方楕円印とも見える)【図3】を捺している。墨書には「帥」の字を用いていると思われるが、印章には「師」を用いている。箱書きは無く、箱の側面に、おそらく骨董商が貼付したラベルが見られ、そこには「森徹山筆 柳下牧童 茶山賛 絹本一幅」と墨書された。画面の中央下半部に安定感のある牛の姿が見られ、画面上部左に柳の幹が画面左端に沿って上方に伸び広がり、

その先に葉っぱを付けた枝がしなっている。また、画面上部の菅茶山による賛【図4】には次のように墨書されている。

前村数里樹依微	前村より数里、樹は依微たり
四野蒼茫暮靄圍	四野蒼茫として暮靄が圍む
新買山童未諳路	新買の山童は未だ路を諳ぜず
縦横只信老牛歸	縦横只だ老牛の歸るを信ず

茶山の賛の意味は、「前に通った村から数里離れて、木々はかすかに見え、周囲の草は青々と広がり、夕暮れの靄が立ちこめる。新たに雇った牧童は、まだ道を覚えていない。自由に動き回る牛が家に帰るのをただ信じるだけである。」と解釈できる。



【図4】菅茶山の賛

淡墨で描かれた牛【図5】の体軀は透明感を増しており、対照的に、肥瘦の線描で明確に描かれた牧童の姿【図6】は、蘆雪の牧童の描写に似る。あどけなさが残る牧童の顔は、写生的である。可能性がどれほどあるかは分からないが、ひょっとすると、徹山は蘆雪の《牧童吹笛図》（京都・久昌院）を見たかもしれない。円山応挙の門人たちの中で、蘆雪と並んで応門十哲の一人に数えられた徹山が、先輩格の蘆雪の絵画を所蔵する京都東山の建仁寺塔頭の一寺院である久昌院を訪れたとしても、それほど意外ではない。

森徹山は、安永4（1775）年に生まれ、天保12（1841）年に亡くなった。大坂の人で、名は守真、字は子真または子玄、号を徹山、通称は文蔵と

称した。森周峰の息子であるが、寛政2（1790）年版の『浪華郷友録』には、周峰の弟に

あたる森狙仙の子と記されていることから、狙仙の養

子になったことが分かる。一時期、大坂の森派を離れて、円山応挙の門人となって、寛政7（1795）年には、但馬香住の大乘寺に応挙や蘆雪と一緒に障壁画を描いた。鹿や猿や栗鼠などの動物画を得意とする。熊本藩主細川斉茲の御用を務め、文政9（1826）年には一代限御絵師として大坂在住のまま熊本藩に召し抱えられている。天保3（1832）年以後、禁裏御所や仙洞御所のために絵画を制作し、天保年間（1830～1843）にも本願寺小寝殿の杉戸絵

を描くなど、重要な御用を担っている。天保12（1841）享年67歳で大坂にて死去した。

「牧童牧牛図」は、中国の宋代の禅文献の中で言及されており、修行と悟りの過程を10枚の絵と偈頌によって示している。逃げた牛を探し出して、一緒に家に帰り着いた後、人と牛ともに姿を消した逸話を説く。これについては複数の物語が存在するが、いずれにせよ、宋代禅の発展によって日本で盛んに描かれ、禅芸術の根拠となった。徹山の《柳下牧童図》の源も、このような禅宗の戒めを描いた「十牛図」の図様にまで遡るが、この画題は、室町時代の雪舟も描いている。要するに、徹山の《柳下牧童図》は、室町時代以来続く人気画題であった。徹山も江戸時代後期に流行した「牧童牧牛図」の図様を選択したわけであるが、この作品は、江戸時代後期という時代から考えると、蘆雪との関係を仄めかすとともに、京と大坂の画家たちの交流と、同時代的な雰囲気を表している。父親の森周峰にも《雨中牧童図屏風》（個人蔵）があり、森派でも一般的な図様であったことが窺える。



【図5】 森徹山《柳下牧童図》（部分）



【図6】森徹山《柳下牧童図》（部分）